埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

保育者養成課程の音楽指導を考えるNo.3：音楽IIIの授業実践を通して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 牧野, 利子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/689

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

保育者養成課程の音楽指導を考える No. 3

── 音楽Ⅲの授業実践を通して ──

牧　野　利　子

はじめに

本研究は，保育者養成課程の音楽指導のあり方を筆者の実践を通して考察することである。

昨年の第16回日本学校音楽教育実践学会全国大会の分科会において，教育実習や保育実習の指導内容に音楽を題材とすることが極めて少ないことが話題となった。これは本学でも同様で，ほとんどの学生が何かしらの作品を制作する活動を選んでいることが，筆者の授業内アンケートから確認出来ている。幼稚園や保育所などにおける音楽の役割は大きく，音楽活動が全くなされない日は無いと言っても過言ではない。保育現場では音楽指導は不可欠である。そのような現状であるのに，なぜ学生は実習において音楽を題材とした内容を部分実習などで行わないのであろうか。入学前の音楽経験の少なさ（特に本学では約半数の学生がピアノ初心者である）による音楽苦手意識が影響しているからなのであろうか。また，他に理由（指導方法が分からない・実習先の要望など）があるのであろうか。これは，どの大学においても同様な傾向であることが確認できた出来事であった。

幼稚園教育要領や保育所保育指針では，「生きる力」を育むことに言及している[(1)]。音楽は人間の心身に直接働きかけることから，まさに生きる力に直結していると言える。本来，音楽は楽しいものである。子どもにとって歌ったり，楽器を鳴らしたり，音楽に合わせて踊ったりすることは，幼稚園や保育所での楽しい活動である。楽しいことは子どもの心身に影響を及ぼし，全身が活発になり，成長を促すこととなる。言葉でのコミュニケーションが十分でない子どもにとって，音楽は重要な意味を持つ。音楽ならではの特性を踏まえて保育に当たれば，幼稚園や保育所がどんなに楽しい場となるのであろう。

子どもたちと音楽遊びを楽しく展開できるような保育者に求められる音楽能力とは，いったい何であろう。また，保育者を養成する課程（学校）ではどのような指導を行えばよいのであろうか。

筆者はこの問題を解決するために，川口短大2年次に行う音楽Ⅲの授業において，今年度は教育実習前に行わせている学生による模擬授業の最初に「音楽で自己紹介すること」を課題に加え

た。すると，今までか細い声でしか歌わなかった学生が大きな声で堂々と替え歌で歌ったり，身振り手振りを入れたり，マラカスをマイクにみたてて全員の学生に歌で「あなたのお名前は？」と聞いて回ったりと，回を重ねるごとに表現方法が豊かになっていったのである。しかも，6月の教育実習Ⅱにてこれを実行した者があらわれ，実習先の子どもたちは大喜びし，園の先生に褒められたりしたのである。

本稿では，2年次に行った「音楽Ⅲ」の授業を振り返り，特にこの「音楽で自己紹介する」実践を詳細に検証して，保育者として必要な音楽能力とは何であるのか，養成課程の音楽指導のあり方を考察する。

Ⅰ　音楽Ⅲの実践概要

1. 授業の背景と問題点

この授業は資料1に示すように，短期大学の2年次前期に設定されている。1年次に行われる音楽Ⅰ音楽Ⅱからの延長として配置されており，授業形態も1クラスを半分に分けてクラス授業と個人レッスンを45分で入れ替わる形式をとっている。しかし，1年次は必修科目であるが，2年次の音楽Ⅲは選択科目に位置付けられているため，全員が履修してはいない。はじめから履修登録しない者や途中から履修を諦めてしまう場合もあり，約7割の学生しか修得していないのが現状である。本校では入学時のアンケートで，約半数の学生がピアノ経験の全く無い，いわゆるピアノ初心者であるが，そういう学生ほど履修を避ける傾向にある。ピアノ初心者が短期大学の音楽授業を1年間履修するだけで現場に就職して，子どもたちと楽しい音楽活動が展開できるのであろうか。懸念されるところである。

また，2年次の後期には音楽関係の授業が無いため，就職試験に際するピアノ指導の時間が取れず，もっぱら専任教員が授業外で指導している。内定をいただいた学生は，たいてい就職前に行われる園での研修に参加する。この際もピアノ伴奏譜を何曲ももらってくる場合が多いが，この指導も授業外のものとなっていて，十分なものとはいえない状態である。そのため，音楽Ⅲでは就職試験に対応出来て，翌4月からの現場も見据えた内容を盛り込むことにしている。短期間で多岐にわたる内容と，多くの課題を課している現状である。

2. 授業に関して

⑴　実施内容

実 践 校　川口短期大学

科 目 名　音楽Ⅲ（資料1）　1単位　選択

対象学生　こども学科 2 年 110 名（4 クラス）

実施期間　平成 24 年前期（4 月13日～8 月 3 日）

全 16 回実施（含実技試験）

授 業 者　筆者（クラス授業）　＊（個人レッスンは非常勤講師 3 名が実施）

授業形態　1 クラスを 2 分し，クラス授業と個人レッスンを 45 分で交代する

資料 1　本学の音楽に関する科目一覧

学年（前期・後期）	授　業　名	
1 年　前期	音楽Ⅰ	必修
後期	音楽Ⅱ 保育内容（表現・音楽）	必修 必修
2 年　前期	**音楽Ⅲ**	**選択**

⑵　本授業のねらい

シラバスに記載しているように，保育者として必要な音楽能力はピアノのテクニック向上にとどまらず，音楽の幅広い経験が必要と考えている。本学では 2 年後期には音楽関係の授業が無いため，実習や就職試験，就職後も見据えた力を修得することを目標にしている。

資料 2　平成 24 年度シラバスより本研究に関するところのみ抜粋

授業目標	（略）保育者としての音楽実践力を高めることを目標とする。（略）多くの楽器奏法を習得して（略），既成概念にとらわれず，幅広い音楽経験の場としたい。
授業概要	（略）コード伴奏法を更に発展した方法や編曲形態を学び，童謡曲や手遊び曲の弾き歌い方法を習得する。また，ギターやアコーディオンでの伴奏方法，ベル・トーンチャイム・他の楽器の奏法も併せて行なう。個人レッスンではピアノ演奏の質の向上を目指すと同時に，実習や就職対応も考慮に入れ（略）

⑶　授業内容（資料 3）

クラス授業の内容は資料 3 の示すとおりである。毎年，少しずつ改良を重ねているが，今年度

資料 3　クラス授業で実施した主な内容

授業回	方 法	内　　容
1	合　同	授業説明・個人レッスンのクラス分け・1 年次の復習
2～4	クラス別	ピアノ奏法の基本練習・伴奏法（片手より両手へ）
5～7	クラス別	模擬授業＋音楽で自己紹介
8	合　同	実技テスト（弾き歌い＋マーチ曲）
教育実習		
9	クラス別	実習の振り返り（アンケート）
10	クラス別	ギター・バイオリンなどの楽器奏法
12～14	クラス別	手遊び曲の伴奏法（前奏後奏の創作）
15	クラス別	ベルの奏法と指導法，ベルの合奏
16	合　同	実技テスト（手遊び曲の弾き歌い＋芸術曲），ベルの合奏

資料 4　模擬授業の設定条件

- 二人ひと組で行う
- 3 歳児に初めて歌を教える時を想定
- 歌詞の内容が分かるために具象物を使用，または動きを伴うこと
- 5 分以内（1 番のみ）

は模擬授業の前に「音楽で自己紹介すること」を課題に加えた。この詳細は次項にて記載する。模擬授業の設定条件は，資料 4 の通りである。

音楽的な内容を自分で考えて（創作），初めて入るクラスにて自己紹介すると言うものである。対象が 3 歳児であるため，分かりやすくはっきりと伝えることを意識させた。

3. 授業の基本方針

⑴ 幅広い音楽経験をする

幼稚園や保育所で展開される音楽活動は，小学校や中学校で行われる音楽教科としての授業ではなく，音楽遊びである。本来，子どもは遊びを通して人間としての資質を養い，成長していく。歌ったり，楽器を鳴らしたりするときも，声を出して歌うことが楽しく，音を鳴らすことが楽しいのである。楽譜通り歌うことが重要ではなく，音楽表現すること自体に意味があると言える。その表現は歌いながら身体を動かし，楽器を鳴らしながら言葉を発すると言う総合的なものである。はじめは音程が定まらなかったり，リズム通りに鳴らせなかったりする。楽しいと感じられる経験が，もっとやりたいと言う気持ちにさせ，意欲をもって遊ぶうちに経験が豊富になり，音楽的な能力も高まっていくものである。そのような子どもの音楽表現を受け止め，やがては音楽芸術へと志向させるようにするには，保育者自らの音楽経験が豊富であることが望ましいと考える。そのため，授業ではピアノのテクニックのみならず，さまざまな楽器奏法，編曲法などを内容としている。

⑵ 音楽を生成する経験を豊富にする[(2)]

音楽表現とは既成の出来上がった曲を演奏することと考えてしまうが，子どもの音楽表現はそのように出来上がったものではなく，赤ちゃんが発する喃語のように自然発生したものであり，形が決まったものではない。歌ったり演奏したりする行為は人間にとって大きな喜びである。しかし，音楽を創造することの方が喜びがはるかに大きいことが脳科学の研究で明らかになっている[(3)]。

授業の中で即興的に伴奏を考えさせたりすると，学生は試行錯誤を繰り返しながらピアノと格闘し始める。夢中で考える経験は，本来人間が持っている能力，創造する力をフル稼働しているのである。既成の曲を演奏するだけではなく，音楽を生成する過程を重視し，課題と課している。

4. 課題の内容

⑴ コードによる伴奏法

本学ではピアノ伴奏をコードで行うよう指導している。子どもは先生の声やピアノの音を頼り

にメロディーを覚える。そのため，右手はメロディーを弾き，左手でコード伴奏をする。コードで伴奏することはピアノ初心者にとって，もっとも簡易な伴奏法である。と同時に，弾く者のテクニックによって，どのようにでも変化させることが出来るものでもある。また，子どもの歌の楽譜は子どもの声の高さに合っていない場合がある。その際，歌いやすい調に変える（移調）ことが必要となる。コード伴奏では，それも容易に出来るのである。1年次の音楽Ⅰ音楽Ⅱでは徹底的にこの指導を行うため（「ちょうちょう」などを12の調で弾く），2年次ではどの学生もある程度出来るようになっている。

そこで，筆者はこのコード伴奏を，2年次では両手で行う（両手伴奏）ことを課題にしている。メロディーの部分は伴奏者の声がその役割を担うことなる。子どもたちがまだ旋律を覚えていなくて，音程が不確かなときは，ピアノでメロディーを弾かなければならない。しかし，もう正しく歌えるようになったら，両手伴奏の方が子どもの声が美しく響くのである。教育実習Ⅰにて課題とした「お帰りの歌」などを両手伴奏で範奏してみせると，学生はその違いに驚き，「かっこいい」と言う。この方法は，芸術的にも表現力豊かであることを実感するのである。

最初は，Cのコードのみで演奏出来る「かえるの合唱」やAmで「なべなべそこぬけ」などのわらべうたを弾かせた。Cの場合，左手はド，右手はドミソではなく第二転回形のソドミにして全音符で弾く。そのポジションに慣れたら，リズムを変えたり合の手を入れたりする。伴奏形態はアルペジオや左右の分担奏のパターンを変えれば無限にあると言える。自分の今あるテクニックを駆使して何度も試し，友人とも教え合う姿が見られた。中間テストでは，「ハッピバースデー」を演奏する者が一番多かった。F・C^7・$B^\flat$の3コードのみであるが，弾き歌いであるため弾くのが精いっぱいで，うたう声が小さくなってしまった者が多かった。

⑵　前奏・後奏の創作

コード伴奏の形態を考えさせることに加え，前奏・後奏も自分で創作させている。前奏はメロディーの最後2小節か4小節をひく方法が一番子どもにとって歌い始めやすい。また，後奏も歌った余韻を楽しむために必要で，これも自分で考えさせている。簡単な内容であるが，授業で筆者がいろいろな例を示して参考にさせた。2回の実技テストでは，これを弾き歌いとして発表させた。ごく簡単なことであるが，学生たちはそれぞれ自分で創作したのである。次に二人の学生の演奏を記す。

右の楽譜は，テスト時に録音したものを筆者が採譜した。

①　「げんこつ山の狸さん」　学生Ａの演奏

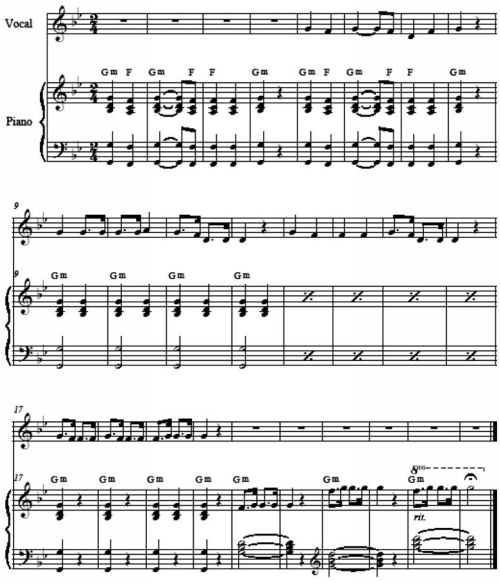
この曲を弾き歌いした学生は，入学時にはピアノ初心者であった。4小節の前奏を入れ，実に大きな声で歌い，歌詞もはっきりと発音していてよく聞きとれた。ペダルも使用したが，メロディー

の部分は１つのコードのみであったため，濁ることなく踏めていた。後奏は同じフレーズを３回繰り返し，rit.（リタルダンド）でdim（ディミニュエンド）したため余韻が残り，わらべうたの懐かしく温かい感じがよく出ていた。

② 「パン屋さんにお買いもの」
学生Ｂの演奏

この作品の学生はピアノ経験者で，前奏と後奏を同じにした。タッチもしっかりしていて歌も良く歌えていた。４小節目の左手の付点音符にアクセントをつけて弾いたため，大変印象深いものとなった。

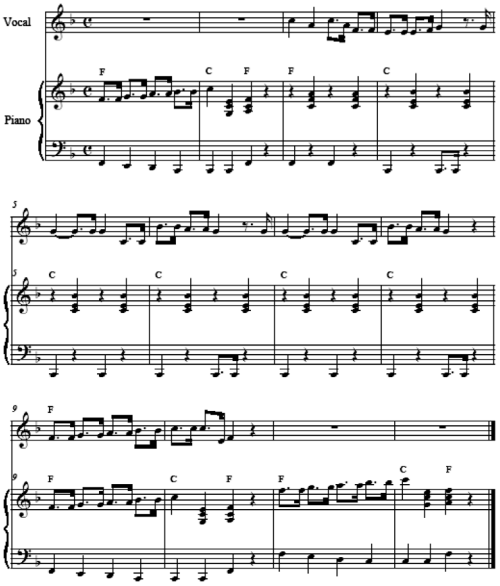
作品 A　げんこつ山の狸さん



⑶ ギターなどの楽器奏法

弾き歌いをするのにはギターは大変有効である。何より，子どもたちの近くで演奏することが出来て，音色も柔らかく美しい。筆者は特別支援学校の実践にて，障害をもった子どもたちが目の前で演奏する教員のギターに魅せられ，それに合わせて声を発して喜んで歌う姿を幾度となく目にしている。保育の現場にも，おそらく有効であると考える。１弦１弦の鳴らし方から始め，半音での上下，「かえるの合唱」を６つの調で弾くことで長音階の音の成り立ちを気付かせる。そのほか，トレモロ奏法やコード奏法などに進み，最終的には４種類ぐらいのコードをマスターする。また，今年度はヴァイオリンにも触れさせたところ，その「音色に大変感動した」と授業感想に書いている学生がいた。

作品 B　パン屋さんにお買いもの



「山の音楽家」の歌詞にヴァイオリンを弾くところのオノマトペ「キュキュキュッキュッキュッ」が出てくるが，この楽器を演奏する場合，はじめは右肩に乗せていた学生が実際に弾いてみることで正し姿勢（左肩に）を知ることにもなった。

毎年，最後の時間にミュージックベルの奏法を指導し，全員で合奏している。保育現場ではよく使用する楽器ではあるが，鳴らした経験のない学生が案外多いのには驚かされた。初めて楽器を手にすると鳴らすことが面白くて，ともすると騒音になってしまうが，子どもはもっと興奮して大音響となる。そのようにならないための指導法も考えさせた。一人が一音を受け持つのであるが，鳴らすタイミングの難しさやその面白さに歓声を上げていた。本年度は，ディズニーでお馴染みの「ハイホー」「ホールニューワールド」「ララルー」を演奏した。これも，「メリーさんのひつじ」程度ではすぐに鳴らせるが，長い曲となると読譜力が必要になることを気付く機会となった。

⑷　学生による模擬授業

教育実習の前に学生による模擬授業を行った。3歳児に歌を初めて教えるときにどう指導するのか，を二人ひと組にして発表するのである。子どもは歌詞を先生の範唱から覚えるのであるが，耳からの音だけで入ってくる場合，間違って覚えることがよくある。「どんぐりころころ　どんぐりこ」（「どんぶりこ」が正解）など，良い例である。歌詞の内容を子どもが理解する際には，視覚的なアプローチ，目で見ることが助けとなる。そのため，具象物（絵やパネルシアター，ペープサートなど）を使用するように指導した。ペープサートを使用する者が一番多く，1年次に別の授業にて制作したパネルシアター，次に自作の絵の順であった。また，動きを伴うことも手立てとしては有効で，歌詞にあわせて動作を付けたりもした。二人ともが先生役をする場合が多かったが，片方が伴奏役のみにまわった例が2例あった。

⑸　童謡曲と手遊び曲の自主練習

クラス授業では伴奏法を指導するが，個々の曲を見る時間はないため，自分で教科書を見て伴奏が出来るようにさせた。片手伴奏と両手伴奏の両方の欄を作り，童謡曲・手遊び曲それぞれ17曲を目標とさせた。1年次，保育内容（表現・音楽）で使用した教科書「うたって　つくってあそぼう」幼児表現教育研究会（音楽の友社），「子どもに大人気　手遊び　指遊び」（ドレミ楽譜出版）の中から選ばせた。「うたって～」の中から夏の歌2曲をコード伴奏で写譜させたが，1年次にも同じ課題をしているのに，すっかり書けなくなっていて間違える学生が多かった。

今年度は，この他に「音楽で自己紹介する」課題をだした。詳細を次に記す。

Ⅱ　「音楽で自己紹介する」実践について

本稿の「はじめに」で記したように，今年度は学生による模擬授業の際に「音楽で自己紹介す

る」と言う課題を設定した。6月に行う教育実習Ⅱでは，ほとんどの学生は昨年実施した幼稚園へ行くことになる。同じ実習園であっても，かかわるクラスは同じとは限らず，初めて入るクラスでは自己紹介をすることになる。そこで，一般的な方法ではなく，音楽で自己紹介すれば，恐らく子どもたちには楽しく感じられ，印象深いものになるのではないか。実習での部分実習をする際に，音楽を題材としない学生にとって，このような内容であれば実施しやすいのではないか，子どもの前で何かしら音楽的な表現をして自信をつけてほしいと考えてのことである。

「音楽で自己紹介する」サンプルとして，次の3種類を提示した。

① ラップ調で行う

メロディーはなく，言葉の面白さをリズムに乗せて言う。拍を手拍子や足のステップ音で自ら鳴らして行う。

② 「かえるの合唱」のメロディーに合わせて，替え歌にする（年少用）

ごく簡単な曲であるが，子どもたちも知っていて聞きとりやすいので，この曲を使用した。

③ 「山の音楽家」の替え歌と，ひざ打ちと手拍子を打ち鳴らしながら動きを伴って行う（年長用）。聞いている人（園児）に参加してもらい，一体感を生み出す効果と，ダンスっぽい動きも加えることによって，より楽しさが感じられるように最後にスカートの端を持って一回りした。

1. 実践結果

⑴ 使用音楽曲

二人ひと組で模擬授業を行う設定であったが，二人が同じ曲で自己紹介したとは限らず，集計すると下記のようになった（資料5）。

資料5 自己紹介使用曲名（計32曲）と使用人数（授業者計103人）

曲　名	人数	曲　名	人数	曲　名	人数
かえるの合唱	20	あくしゅでこんにちは	3	アブラハム	1
森のくまさん	11	ドラえもん	2	ハピバースデイ	1
ミッキーマウス	11	雨降りくまの子	2	ドレミのうた	1
山の音楽家	7	とんぼのめがね	2	キャベツの中から	1
キラキラ星	5	チューリップ	2	カレーライス	1
メリーさんの羊	4	先生おはよう	1	うさぎとかめ	1
ちょうちょう	4	大きな歌	1	ウィーウッシュ	1
あなたのお名前は	4	めだかの学校	1	アマリリス	1
ぶんぶんぶん	3	ふしぎなポケット	1	金太郎	1
大きな栗の木の下で	3	ひげじいさん	1	こぶたぬきつねこ	1

この課題の説明をする時，サンプルとして「かえるの合唱」で何種類か示し，歌以外の方法もアイデアを教示した。しかし，実際に学生が行ったのは既成の童謡曲や手遊び曲であった。また，使用した曲は 32 曲にもなった。それぞれ自分で歌いやすい曲を選んだと言える。

⑵　表現形態

ほぼ全員が替え歌にした（1 名のみ除いて）。しかし，その表現方法は様々で，主な特徴を分類すると右記の通りになった（資料 6）。

資料 6　表現形態の詳細とその数

表現形態	数	詳　細	数
替え歌	102	歌のみ（棒立ち）	64
		手拍子付き（自分で）	11
		振りつき	7
		楽器持ち	9
		伴奏付き	2
		絵付き	3
		みんなにマイクを向けて	4
		ひざ打ち付き	2
それ以外	1		

聞いている学生たちは，自己紹介の曲にあわせて自然発生的に手拍子をする者が現れ，授業者本人が手拍子を要求した場合を合わせると 51 曲になった。被授業者に要求した手拍子の中には，リズム形を指定する者も現れた。

始めは，ただ立って「私の名前は○○です」と替え歌で歌うのみであったが，回を重ねるごとに（全 3 回）紹介内容は豊富になり，手振りや左右に揺れてステップを踏む者，楽器を鳴らしながら歌う，聞いている学生にマイク（マラカス）を向ける者まで現れた。また，自分の名前を一文字ずつ絵で表しながら歌った者もいた。表現方法は多岐にわたっていた。

⑶　授業者の様子

- 替え歌の原曲通りのメロディーで，正しく声も大きく歌えていた。（普段は音程が正しくない場合が多い）
- 数名の学生を除いて，歌詞をしっかり暗記していた。（事前の準備がうかがえた）
- 全員の方をしっかり見て，笑顔で歌えていた。（楽しそうであった）
- 自己紹介の前に，これから始まることに関する言葉がけを分かりやすく言っていた。
- 次に始まる模擬授業へのつなぎの言葉がスムーズであった。
- 先に行った学生の表現を参考にして，表現方法がどんどん変容（向上）していった。

以上，実に堂々と表現しているのが確認できた。

⑷　被授業者の様子

- 授業者をサポートしようと言う意図が見られた。（ことばがうまく出ない場合，「先生が

んばって」など）

・自然に歌に引き込まれ，拍に合わせて手拍子をした。

・授業者の問いかけに，大きな声で応えていた。

・曲に合わせて自然に体が動いて（揺れて）いた。

以上，被授業者もリラックスして楽しんでいる様子が確認できた。

⑸　学生による実施後の記述より

実施後に，音楽で自己紹介する際の方法やアイデア，実施の振り返りの意味で自己評価する内容を記述させた。主なものを下記に記す（資料 7）。

資料 7　学生の記述による方法と評価内容

学生	曲　名	方法・アイデア	評価・考察
A	かえるの合唱	替え歌「私の名前は○○です。たくさんたくさん遊びましょう」	もう少し子どもに分かりやすいように大きな声で歌ったら良かった。また，リズムをやってもらったり，自分で振付けをすれば良かったと思った。
T	もりのくまさん	膝をたたきながら，替え歌を歌う。二人とも同じ曲で続ける。	二人で協力するといいことが分かった。
K	ミッキーマウス	替え歌「私の名前は○○です。○先生と読んでね。絵本や手遊び，外遊び，大好きみんなであそびましょ」	みんなが一度は聞いたことがある曲で自己紹介することにより，子どもたちも覚えやすいし，興味を持ってくれるかと思った。
W	山の音楽家	曲のテンポを子どもに拍手で叩いてもらい，一緒に楽しんでもらう。替え歌「私の名前は○○です。今日から皆さんよろしくね。お絵かきしたり，おうた歌ったり，追いかけっこしたり，折り紙したり，たくさんあそんでね。」最後にお辞儀。	テンポは子どもに分かりやすく，ゆっくり目の方がいいんだなと感じた。ただ歌うだけじゃなくて，人形も使ったり子どもをひきつける物もあったら良かったと思った。
S	キラキラ星	替え歌	上手く言葉が繋がらなくて止まってしまったのは良くないと思った。自分たちだけで歌うときは，もっとたくさん楽しめるように工夫したら良いと思った。
Y	あなたのおなまえは	初めに「あなたのおなまえは？」と歌い，マラカスをマイク代わりにして，一人ひとり名前を聞いていく。保育者も自己紹介する。	一人ひとり聞いていく時，もう少し時間をかけた方が良かった。そうすることで，一人ひとりと関係を築けると思ったから。
N	あくしゅでこんにちは	替え歌「私の名前は，○○です。△△組さん，仲良くしてね」・マラカスを鳴らして，明るく（歌う）	ただ言葉で自己紹介するのではなく，子どもたちの知っている歌で気を引き，楽器などを使い，明るく歌うことで「面白い先生だな」と子どもたちも思ってくれるだろう。
K	チューリップ	替え歌。タンバリンは歌に合わせて演奏する。音楽に合わせて身体も動かす。	視覚教材を使って自己紹介したほうが，名前を覚えてもらいやすいと思った。少し緊張したので，あまり緊張しないようにすることも必要だと思った。
U	ドレミのうた	替え歌。名前の一文字ずつ書いた絵を使用	絵で子どもを惹きつけられるのではないかと思った。でも，もっと工夫したいと思った。
Y	うさぎとかめ	替え歌「もしもしみなさんこんにちは　私の名前は○○，今日から一緒によろしくね たくさん楽しくあそびましょ」・手拍子	名前と「今日から」「遊びましょう」のところを，子どもたちが分かるように歌う。手拍子も，みんなで一緒にやってもらうと良い。
T	ウィーウィッシュユアメリークリスマス	替え歌「私の名前は○○です。今日からどうぞよろしくね。さあみんな，○○先生と読んでみてね。○○先生」	替え歌にすることで，歌っていてとても楽しくなって，良かった。他の曲でもいろいろ変えてやってみたいと思った。

実施したことにより，３歳児に分かりやすく話す際の声の調子や態度，具象物を使用する効果，更には事前の準備の必要性などの気づきがあったことが確認出来た。

⑹　教育実習への実践結果（アンケートより）

・実践した結果

実際に教育実習にて実践した学生は 11 名であった。

実践の詳細は下記の通りである（資料 8）。

資料 8　実習園で実施した詳細

	ピアノ経験の　有　無	使 用 曲 名	子どもたちの反応	実習園の先生の感想
1	有	メリーさんのひつじ	楽しんでくれた	声をもう少し大きくすると良かった
2	有	ちょうちょう	年少　喜んでくれた 年中年長　不思議な顔をしてた	とても良い。次回はもっと大きな声で
3	有	ミッキーマウス	おもしろがって手拍子してくれた	面白い発想で良いですね
4	有	アマリリス	良くない	練習すれば大丈夫と助言
5	有	もりのくまさん	手拍子してくれた	無回答
6	無	かえるの合唱	手拍子をして楽しんでくれた	初めて見た。とても良かった
7	無	山の音楽家	何が始まるんだろう？と見ていた	子どもたちが引き込まれていた
8	無	ミッキーマウス	真剣に聞いてくれた	無回答
9	無	キラキラ星	手拍子をしてくれた	インパクトがあって良かった
10	無	ミッキーマウス	聞いていた	良かった
11	無	ドレミの歌	名前の絵に興味を示し，楽しんでくれた。計 3 回実施	アイデアがとても良い

実践した時間はどれも実習クラスに入った初日であり，全員が実践して良かったと回答している。実践した学生の入学前のピアノ経験の有無は 5 名が経験者，6 名が経験無しで，約半々と言える。ピアノ経験の有無にかかわらず実践したと言えよう。また，子どもたちの反応はおおむね喜んでくれたようで，実習先の教員の感想も良好であったと言える。

・実践しなかった結果

実際に実践しなかった学生は，その理由を時間が無かった・機会が無かった・その他から選ばせたところ，機会が無かった，時間がなかったの順で回答した。音楽で自己紹介すること自体，それほど時間のかかることではないが，それを行うタイミングや状況は現場

にいる者でしか分からないので判断できない。しかし，いきなり歌で自己紹介するのは，確かに勇気がいる行為であることは間違いない。

⑺ 実践分析

・本実践は学生に能動的な音楽表現を引き出すことが出来たか。

下記の理由により，引き出すことが出来たと言える。

① 演奏曲目の多さ

サンプル曲「かえるの合唱」以外に 31 曲もあり，学生が自分なりに歌いやすい曲を選出した。

② 多種多様の表現方法

替え歌にするだけでなく，歌詞の内容を「好きなこと」や「好きな食べ物」,「実習園名」なども挿入した。また，楽器を使用したり動きを伴ったり，絵の使用も見られ，それぞれが主体的に工夫した跡が見られた。

③ 授業者の態度

いつもなら歌詞があやふやだったり，少し音程がずれて歌う事があるが，誰もが歌詞を暗記し，音程も正しく，しかも，堂々と歌っていた。何度も練習したことがうかがえる。

④ 実習を見据えての被授業者への言葉がけ

模擬授業の前に行う設定であったが，終始一貫して 3 歳児に分かりやすい言葉を使用。自己紹介の前後の言葉がけやこの後に続く模擬授業も先生に成りきった態度で，大変スムーズであった。

⑤ 被授業者としての能動的な態度

授業を行う以外は被授業者としての役割があったが，授業者に対して大変協力的で，進んで楽しもうとしている態度が確認できた。

・教育実習への影響

下記の理由により，実習への影響があったと言える。

① 約 1 割の学生が実習園でこの実践を行った。

責任実習としての内容ではなかったが，自己紹介時にこの方法を実践したことは嬉しい驚きでもあった。このこと自体，過去の実習には見られなかったことで，授業の成果と言える。

② 実習先での高評価

子どもたちの反応の良さ（多少のとまどいはあったもの 1 例），実習園の教員の感想

などから，本実践はインパクトがあったようである。実習期間内に子どもから「もう一回やって」，と要求された学生もいた。本実践は実習園にて好意的に受け入れられたと言える。

③　保育実習への影響

本実践を行った学生は，「保育実習でもやってみる」と言っていた。本年度の夏休みにある保育実習にて，今回の経験をさらに次に活かそうとしている。今回の実践が次への実践へと繋がっていくことが確認できた。

・本実践の問題点

筆者は本実践のサンプルとして 3 例を提示した。しかし，実際に学生が行った方法は 1 例を除いて替え歌であった。「歌」で自己紹介ではなく，敢えて「音楽」としたところには，音楽を広く捉えて欲しいとの意図があった。子どもが歌を歌うようになる過程は，赤ちゃんのクーイングや喃語，気分が良い時の幼児の即興歌，興味のある言葉で繰り返されるオノマトペなど，実にさまざまな表現がある。また，身近にある物を鳴らし，好きなように音と戯れる。そのような自由な遊びの中から生み出される表現方法を用いた自己紹介がもっとあっても良かったのではないか。サンプルを提示する筆者の今後の課題としたい。

Ⅲ　考　　察

実習園で何かしらの音楽表現をしてほしいとの思いから，毎年行っている授業内容のほかに，「音楽で自己紹介」と言う課題を学生に課した。実践し始めて，学生の堂々とした態度・多岐にわたる表現方法にこちらが圧倒されてしまった。恥ずかしがったり，方法が分からなかったりして，どぎまぎする姿を想像していたからである。実際には，授業者も被授業者も実に楽しそうに本実践を行っていた。学生たちのこの課題に取り組む姿勢は実に積極的（能動的）であり，表現することを楽しんでいた。この要因を整理すると，

「音楽を生成する喜び」と「共に音楽する喜び」

であると言える。

はじめは教員の示した例を模倣し，次に自己紹介であるから自分に関することを歌詞にしてみる。また，それを披露する実習園の子どもたちに思いを馳せ，園名など子どもたちに喜んで理解してくれそうな言葉を選ぶ。次第に音楽的な表現内容も変えてみようと試行錯誤する。楽器の使用や動きを伴う方法，言葉だけでは理解しにくいから絵を使ってみる。替え歌にするといった単純な行為であるが，いつの間にか音楽を作りかえる（生成）ことに夢中になったのである。脳科

学の研究では，音楽表現の中で音楽を創る行為が一番楽しいということが明らかになっている。まさに，これではなかろうか。

学生が自由につくりかえていった背景には，これまでの音楽経験が土台になっていると思われる。それぞれの入学以前の経験に加え，1年次の授業でも頻繁に音楽を創造する課題を課してきた。音楽Ⅲではコード伴奏を一段階上の両手伴奏法を学び，しかも伴奏形のみならず前奏や後奏も創作させている。既成の出来上がった曲を演奏することだけでなく，自由に作り変えることの意味を理解し，その行為が大きな喜びとなることを授業を通して体験したのである。音楽を幅広く捉える概念が定着しつつあるともいえる。

また，時実利彦（脳科学研究の草分け的存在）は，その著「脳と保育」(1974）に，人間の本能の一つに集団欲を挙げている。人間の生きるための本能は，「食欲」「性欲」「集団欲」であり，特に「集団欲」は他の動物と異なるもので，重要視している。人間は一人では生きられず，常に「他者と共に生きたい」と言う本能があると説く。音楽にはこの集団欲を満たす条件が揃っているのではないかと筆者は考えるのである。授業で自作の替え歌を披露する際に，みんながのりのりで拍手をしてくれる。ウィリアム・ベンゾンは，その著「音楽する脳」(2005）にて，拍を合わせられるのは人間だけの特性と説く。音楽の特性は人と繋がること，演奏する・聴いて身体を揺する・拍に合わせて手拍子をする行為は，まさに他者とコミュニケーションしている行為である。共に音楽することで集団欲が満たされたとは考えられないか。

実習を見据えた一方法が，たとえ実施者が1割といえども，実践者が現れたことは喜ばしいことである。音楽的には何ら高度なことではないが，学生にとっては勇気のいることであったと思う。それが，実習先にて音楽表現するきっかけになれば，授業で行っている模擬授業も，あるいは責任実習で行うようになるかもしれない。

本実践の今後の課題として

① 1年次の音楽Ⅰ・音楽Ⅱ・保育内容（表現・音楽）との連携の必要性

② 2年次後期の音楽授業の開設

が挙げられる。①に関しては，授業を始めてみると学生に読譜力の能力が十分でないことに気がついた。両手伴奏の音読みをしたところ，ヘ音記号の音はもとより，5線上からはみ出した加線の音は全く読めていなかった。そのため，授業外に補習を2回行った。幸いこれに参加した学生はしっかり力が付き，それを機会に自主練習も多くするようになり，期末テストでは難しい曲も弾けるようになったのである。また，学内で一斉に行う授業アンケートの結果が示すように，学生自身の予習復習が大変不足していることが明確になっている。音楽は自分で練習しなくては，演奏能力の向上はあり得ない。自分で時間をかけて楽譜に向かってこそ，授業で学んだことが定着するのである。簡単なメロディーも，誰かに弾いてもらわなければ音に具現化出来ず，レパー

トリーは増えないし間違った曲として教える危険性も大きい。耳からではなく，目からの理解力が必要である。

古谷晋一はその著「ピアニストの脳を科学する」(2012) にて，ピアノを弾くという行為がいかに特別な脳が働いていて，複雑なメカニズムであるかを明らかにしている。楽譜を見る目からの情報と，それを理解する脳，それを指や手に伝える運動野への働きかけ，音を出しながら自分の演奏表現の修正をする。実に一度に沢山のことをしているのである。これは，相当な練習の結果出来上がる能力であるから，少々の練習では演奏能力は高められないことを示している。瞬時に楽譜を読む力がいかに必要か。

後期から始まる保育内容（表現・音楽）1 年次には，早速このことを踏まえて指導を始めたところである。

②に関しては，本学では 2 年次後期には音楽の授業が開設されておらず，就職試験対応や内定後の研修対策が出来ていない。専任の教員が授業外にこの指導に当たっているが，やはり授業が無いとピアノに向かう時間が減るのは当然である。筆者が行った授業内アンケートにて，このことを指摘している（不安に思っている）学生が多いことが確認できている。何らかの措置（開講）が必要であろう。

今回の新たな試みで，実習にてピアノの伴奏をするだけから脱却の糸口が見つかったような気がする。音楽Ⅲの授業にて実施した内容を検証すると，音楽的な能力を付けるためは，いかにやる気を出させるかが重要であるかということが理解できる。単に授業を受ける（受動的）のではなく，能動的にさせると言うことであろう。それにはもっとやりたいと思わせるような内容，音楽していることそのものが楽しいと感じられるものでなくてはならない。学生自らが楽しい音楽経験をしていれば，保育の現場に出た時，それが自然に全身で現れ，ミラーニューロン（模倣細胞）の発達が真っ盛りの子どもたちに好影響するであろう。

本研究の結果を踏まえ，実習先にかかわらず，就職先の現場でも子どもたちと楽しい音楽遊びが展開出来るように，保育者養成課程として，より質の高い指導をしたいと考える。

《注》

（1） 平成 10 年 12 月，幼稚園教育要領が改正された際に，第 1 章総則 2 の文中に，「生きる力の基礎を育成する」との文言が入れられた。平成 20 年 3 月の改正においても，第 1 章総則第 2 教育過程の編成の中にそのまま残されている。また，保育所保育指針第 1 章総則 3 保育の目標においては，「現在を最も良く生き，望ましい未来をつくり出す基礎を培う」と記述されていて，「生きる力」と同じ意味であると言えよう。乳幼児教育の目標として，「生きる力」が重要視されていると言える。

（2）「音楽を生成する」とは，日本学校音楽教育実践学会が提唱している考え方である。初代会長であった西園芳信はその意味を，「音とリズムのパターンによって外界に音楽の表現をつくること」，その過

程で「音楽表現に新しい響きと意味を発見し，自らの思考と経験をつくりかえること」としている。また，現会長の小島律子は，「人間が音や音楽に働きかけ，音楽を組織化することによって，外部世界に音楽表現を形づくること」としている。授業においては，この生成の理論に共感し，実践している。

（3） ウィリアム・ベンゾンは，その著「音楽する脳」の中で，音楽する喜びについて記している。聴くことや演奏することは，脳の中で喜びに関するところが活発になる。中でも，音楽を創造する行為が最も喜びが大きく，ジャズなどの即興演奏の意味を説いている。

また，福井一は，その著「音楽の感動を科学する」（2010）の中で，脳科学の分野からアプローチしている。人間にとって音楽が喜びの感情を起こすこと，音楽が生理的な反応を起こし，変化する詳細を説明している。音楽の創造行為がいかに人間ならではの行為であり，喜びであるか。学校教育においても，既成の曲の再現だけではなく，何らかの創造することを経験させる内容が必要と述べている。

参考文献

時実利彦（1974）「脳と保育」雷鳥社
小泉英明編著（2008）「脳科学と芸術」工作舎
福井一（2010）「音楽の感動を科学する」科学同人
マルコ・イアコボーニ　塩原通緒訳（2009）「ミラーニューロンの発見」早川書房
マイケル・I・ポズナー　無藤隆監修（2012）「脳を教育する」青灯社
須藤貢明・杵鞭広美（2010）「音楽表現の科学」アリテスパブリッシング
ウィリアム・ベンゾン（2005）西田美緒子訳「音楽する脳」角川書店
ジュスリン＆スロボダ　大串健吾ほか訳（2008）「音楽と感情の心理学」誠信書房
ドン・キャンベル　北山敦康訳（1997）「音楽脳入門」音楽の友社
山田真司・西山磯春（2011）「音楽はなぜ心に響くのか」コロナ社
古谷晋一（2012）「ピアニストの脳を科学する」春秋社
小島律子（2011）「新訂版　小学校音楽家の学習指導 ── 生成の原理による授業デザイン ──」廣済堂
日本学校音楽教育実践学会編（2006）「日本学校教育研究　第7巻」日本学校教育実践学会

（2012年9月28日提出）